

発信力の強化は国際的なニーズの理解から

Widening Access and Strengthening Communication Networks Starts with Understanding the Needs of International Users

小出 いずみ*

皆さんこんにちは、渋沢栄一記念財団の小出です。今日は長丁場で、朝から海外からいらっしゃいました7人の研修生のお話を聞き、そして午前中の最後には国際文化会館の林さんのコメントを聞きました。その間に考えたことについて、これからお話しさせていただこうと思います。

最初のスライドですが、まず、「学術的枠組み」の違い、ということを考えました。海外のライブリアンや研究者たちが活動しているときの相手、つまりサービスを提供している相手ですが、その人たちが研究している環境はどういう所か見てみましょう。すると、日本だけを必ずしも研究している訳ではない、日本美術だけでなく、いろんな国の美術と比較する、学問的にそういう手法が増えてきている、ということが、まず挙げられます。次に、研修生の皆さんは海外で勤務しているということもあり、国際的な文脈の中にいる、ということは欠かせない背景です。美術の対象に迫るアプローチが「この作品を見るときに別の作品も見ろ」というような見方であり、比較研究や国際的な文脈の中に研究があるということは、私達日本で日本について研究している人達をサポートしている者からみると、かなり違う、ということを思いました。

もう一つのポイントは、誰かが「日本では美術研究が蝸壺化しているのではないか」と言いましたが、海外で顕著なのはそれとは逆の方向です。「マルチディシプリン化」あるいは「マルチメディア化」と言ってもいいかもしれません。美術の研究をしても、その美術と文学との関係ですとか、多岐にわたるいろいろな分野の中で美術作品を比べて研究する、文化状況の文脈で総体的に作品をとらえようとするということが、とくに近年、海外ではとても多い。たとえば大英博物館で

の土偶展に漫画が展示されたなどはいいい例です。それに対して、日本の美術研究の人はかなり細分化されていてその中で研究しているということをおそらく「蝸壺化」とおっしゃったんですが、日本側にそういう傾向があることを、今回海外の方たちは発見したわけです。このように学術的な枠組みの違いが内外のギャップに非常に大きく関係している、と思いました。

次のスライドですが、言語の問題とか、翻訳の問題、というのが皆さんの発表に出てきました。これは研究対象が美術であること、視覚的であるという特徴から、専門家でなくても見れば分かる、という特徴があることと多少関係があるかもしれません。もちろん本当に理解したかどうかは別ですが、人目を引いたり、眺めたり、見て観賞する際に、専門知識が必ずしも必要でない場合も多々あります。つまり美術研究をする人というのは専門家だけではない広がりがある。美術館に来場する一般の人たちのことを考えたらすぐ分かると思いますが、それは美術館だけではなく、美術を専攻する学生達についても言えます。さきほどの「学術的な枠組み」の場合と同じですが、いろいろな国の美術を学ぶ一つとして日本美術を学ぶケースは非常に多い。「アジアの美術」といった授業を想像したらすぐわかると思いますが、そのような授業が、日本美術だけに焦点を当てた科目よりも何倍も多く、全世界の大学で提供されているのは間違いないでしょう。つまり日本語が分からなくても、日本美術が自分の勉強の対象に入ってくる場合があるわけです。よく聞くのは、大学の映画学科で使いたいのでサブタイトル・字幕付きの映画が無いのか、という類の質問です。たとえばアメリカで日本の映画を授業で取り上げたい、字幕が付いていれば映画研究の授業に使える、役に立つのだけれども、そういうものが無い

* こいで いずみ（公益財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター長, Koide Izumi, Director, Resource Center for the History of Entrepreneurship Shibusawa Eiichi Memorial Foundation)

か、と探していて、この JAL プログラムではなく、飛行機会社の JAL の機内で上映されている映画は字幕が付いている、あれは手に入らないか、という話もありました。そして、英語なりで情報が豊富な対象が教育や研究で取り上げられ、情報が少なければ使われないことになります。美術作品自体の魅力や重要性がずば抜けて高くない限り、顧みられなくなります。

私言葉が分からなくても日本美術について勉強したり研究したりする場合があることを、日本にいる人達は頭に入れないとは思いません。「日本のことを勉強するなら日本語を勉強してからにすべき」というような主張はここでは通りません。それが翻訳・言語問題の一点目です。

二点目は、本格的に研究する人たち、つまり日本語を理解して研究する人たちは大勢いるわけですが、研究者と資料をつなぐ人たち、つまり司書の人達は日本語が十全に分かるとは限らない。例えば映画学科のライブラリアンは別に日本語ができなくても、映画一般は扱えるわけで、そういう人たちはほとんどの場合日本語が分からない。その人達はどうやって日本の美術なり映画なりの研究や教育をサポートするのでしょうか。ここに大きな困難があります。それが翻訳とか言語的な問題が注目を集め、クローズアップされる所以だと思いました。

そう考えてくると、次のスライドになりますが、問題は美術分野だけかと言うと、必ずしもそうではないことに思い当たります。水谷さんが朝一番に紹介した「皆さんが知っているデータベース」のアンケート結果がありました。その中で、「皆さんが知っている」と言うのは、CiNii だったり WebCat Plus だったり、本当にベーシックな日本の文献情報を扱うデータベースでした。美術だけに特化したものは案外知られてないことがわかりました。この意味するところは、海外での美術情報提供の基盤になっているのは美術だけに特化した情報源ではなくもっと一般的な、日本の研究情報基盤が頼られている実態が明らかになったのだと思います。逆に言えば、展覧会の図録などを思い浮かべるとタイトルや責任表示が定まらなかったりする状況があつて「美術関係の文献情報は特殊」かもしれませんが、それでも日本

の包括的な情報基盤を通じて探索できるようにしておく必要があるのだと思います。美術の世界的な文献情報源に日本のものも必ず入っているという状況が作り出せるのであれば話は別ですが。

問題は美術分野に限らない、という点からいえば、こんなこともあります。美術の画像利用の話が今日は沢山出ましたが、実は画像利用は、美術分野だけではなくて、本当に一般的で大きな学問的潮流であります。2008 年になりますけれども、今日も名前が出ましたが NCC（北米日本研究資料調整協議会）という組織があり、その人達の企画で「ジャパン・イメージ—海外日本研究のための画像利用事情—」と題するシンポジウムを東京でやりました。これがその記録です（『海外日本研究者の画像利用事情《東京シンポジウムの記録》』）。これはまだ余部が少しありますので、もし欲しい方は後でお知らせください。この中で議論したのですが、美術だけでなく、社会学、歴史、それから様々な方面の研究者、たとえば現代社会研究でも人類学でも、非常によく画像を使う。授業でも使います。さらに今の時代、自分の著作、学術書であっても、画像や図版を入れて出版するのが当たり前、という状況があります。ところが日本由来の画像を海外で利用するためにはさまざまな障害がある、それを何とか解決できないか、という研究者からの提起があつて、その解決を目指したプロジェクトの一環でこのシンポジウムが開催されました。授業や著書で使う画像の入手や利用許可の相談を受けるのは、北米ではライブラリアンなのです。スライドに「IUP」と書きましたが、これは「Image Use Protocol」の略で、画像利用を巡る手続きのことを指しています。なぜ「Protocol」と呼んだかと言うと、法律的な問題は内外で相当違う、それから慣習も違う、そういう所で「手続き」にあたることを示す言葉として、「Protocol」という名前が付きました。NCC はアメリカ・北米の組織の活動でしたが、法的権利の整理だけで解決するような問題ではないためにプロトコル、外交儀礼、と呼ぶことにしました。このプロジェクトの結果、日本発の画像を利用する時にはどうしたらいいかについて Web サイトに案内ページができました。その時に思ったのは、「アクセスできる」とはどういうことなの

か、ということです。とりわけアメリカでは、「アクセスできる」と言うのは「見ることができる」レベルではない。アクセスして使えなければ、彼らにとっては「アクセス」にならない。ただ見たり、観賞したりということではなく、「自分でそれを使う」という事が前提のアクセスである場合が非常に多いのだと、私も含め日本側の人達はこの会議によって学びました。「アクセス」という言葉で期待されていることが、恐らく日本と海外、特に欧米とは違う、ということを入念に入れておく必要があります。

次のスライドはネットワークの問題を取り上げました。海外には、たとえば日本美術に特化した **Japan Art History Forum** のような既存のネットワークが結構あります。それが重要だという事、海外の研究者の間、あるいは、ライブラリアンの間のネットワークに、日本からも発信することが非常に重要だと思います。これは一番簡単にできることだと思います。そのようなネットワークではたいがい、英語を使っていますので、英語で発信しなければなりません。億劫かもしれませんが、例えば、「このサイトを見て下さい」という、URL を送って紹介するだけでも非常に役に立つ場合が多いです。そのくらいの英語はみなさん頑張れば書けるでしょう。海外の既存のネットワークに日本から参加する事は、新しいネットワークやメーリングリストを作るまでもなく可能ですから、そういう事も積極的に考えていきたい、と思いました。

それからもう一つは、日本国内のネットワークの強化とオープン化です。日本国内の美術関係の図書館の人達は、やっぱりそれなりのネットワークを持ってらっしゃいますし、いろんなことをやっています。それをもっと「宣伝する」と言いますか、そこに、先ほどの話とは逆ですが、海外の人達も入ってもらえるような、そういう様な形がとれないでしょうか。それは、英語の投稿があってもいいですし、ここにいる人達のように日本語ができる人が多いですからそれでもいいという位の寛容さのあるものにしたらいと思います。昔は海外の機関にあるコンピュータで日本語を書くことができませんでした。特殊なソフトを入れなくてはならないのにそういうソフトが便

利にできているわけでもなく、本当に前は難しかったのです。しかし今はグローバル **IME** が出来て日本語を書くことが簡単に出来るようになったわけですから、日本語でも書いていただけますし、英語でもいいですよ、というふうな呼びかけというのが出来ると思います。もしかしたら障壁は、排他的な心理的な感覚の方かもしれません。

次のスライドは、情報の集約やツールの開発についてです。皆さんの感想の中に「情報が散らばっている」とか「伝える力が弱い」とか、それから「メタ情報センターが欲しい」、あるいは「ワン・ストップ・サーチが出来ればいいのに」という話が沢山ありました。これは、その萌芽みたいなものかもしれませんが、少しは日本にもあるはずなのです。しかしそれが知られていない、あるいは、それが成長していついていない、という現実があるかもしれない、と思いました。たとえば「文化遺産オンライン」がありますが、あれは中身のカバレッジが小さいです。それは「どういう人に向けて、何故作っているのか？」という、コンセプトが弱いところから来ているのではないかと思います。今は、良品主義というのか、「綺麗な良いものが見られるよ」というレベルだと思います。それだけではなく、もっと深く広く「文化遺産」を研究しようと思っている人達にも使えるようなシステムになるといいな、と思いますし、そういうツールの開発が必要なんじゃないでしょうか。

ライブラリアンの人達は、日本の美術関係のライブラリアンでも、今までに参考図書のような、リサーチのためのツールを数多く作ってきました。紙の時代にやってきたツールの開発を、Webでも出来ないのでしょうか。作るのは、前より易しくなった面もあると思います。本を出版したら、記載した情報が間違っていた場合、訂正するのが大変だったりしますが、デジタルであれば、それよりは少し簡単に出来るわけですから、もっとツールの開発をしていただきたい、と思いました。私の経験から言うと、ライブラリアンは自分たちの仕事をしやすくするために自分たちが使えるツールを、内部用に作るがよくあります。ところがそれは、他の人にも役に立つ場合が多いといえます。したがって、内部向けに作っているツ

ールを出来るだけ外の人にも使ってもらい、公開する方向を考えて行けたらいいのではないかと思います。その上で、おそらく努力しないと出来ないのは、そのような情報源の情報を一か所に集めた案内のサイトだと思います。「メタ情報センター」と「ワン・ストップ・サーチ」とスライドにあるのは、ツールのツール、ツールの情報集約をすると伝える力が強化されると考えるからです。ツールの案内サイトの作成・提供は協力しないと出来ないことと思いますが、そのような協力が今後積み重ねられていくことを期待したいと思いました。

最後のスライドは発信力についてです。このワークショップのテーマに、「発信力の向上」とありますが、「発信力」が足りない、というのが日本の現場の人たちが危惧していることなのでしょう。ここで根本に立ち戻って、「発信力」というのは何から構成されているか考えてみましょう。発信力はいくつかの要素で成り立っている、と私は考えています。まず、「情報集約」、それから国際的には「英語化すること」、そして、「オープン化すること」。このような要素がないと「発信力」はちっとも向上しない、と私は思います。しかしそれにもまして、発信するには「ビジョン」が必要だと思います。「何を目指して何を発信するか」「誰に向けて発信するか」「どの様に発信するか」こういう様な大きな「構図」、「プラン」、建築の設計図のようなものが無いと、せっかくやっているのに見てもらえなかったり、役に立たなかったり、的外れになったり、という事が起こります。つまり、きちんと組み立てて発信しないと、無駄になること、ときには逆効果になることさえあります。

それで例えば、本に「ブックレビュー」があるように「書評」があるように、Webサイトの「批評」「レビュー」、Webサイトの「サイト評」というのがあると切磋琢磨できてよいのではないかと思います。「Facebook」で「いいね！」と言うのがありますが、そういう瞬発的な反応はなくて、「ここのサイト、こういう点でいい」とか「こういう点が足りない」とか「もっとこうあって欲しい」とか、率直な建設的な批評がとても役に立つと思います。作ったら作りっぱなし、そういう

話が見学の感想の中にチラッと出てきましたが、作ったものを批判的に見てみる努力が無いと、作るのには本当に大変ですから作ったところで脱力してしまってデータを足して行くことができない事がよくあるようです。そういう状況に対して、特に海外から「評」をもらうという事はとても重要です。なぜなら、海外から見ると「こう見えるよ」と利用者の目線で言うていただくことは、日本のいろんな機関の人達に非常に役に立ちますし、「外圧に弱い」ということで政策としてお金を出す方に対して有効な手段である、私は思います。ですから是非「Web サイト評」というのをちょっと考えていただきたい。それは研修生の皆さんが持っていらっしゃるネットワーク、たとえばメーリングリストで、「あ〜だ、こ〜だ」と言うのもよいと思います。おしゃべりレベルではなくて、もう少しまとまった小さい記事にすると効果的かと思います。そんなふうに共有し、さらに日本側でも共有出来るように持って行っていただくと、役に立つと思いました。

実は、美術に限らず、日本の事を研究している日本人の研究者にはどういう人が多いかという、これは私の一種の偏見ですけれども、英語が出来ないから「日本のことをやる」という人で、「日本の事を日本人がやっているのだから、外国人には分からないだろう」と思っている節があります。そういう人が実は非常に多いように感じます。そういう意味でかなり「閉鎖的」なところがあるのは事実です。それをどうやって開いていくか、課題ではありますが、研修生の皆さんは一つの「鍵」を持っています。海外で日本の事を研究している人達は「こういう環境で研究している」、「こういう情報が求められている」、「ここに興味を感じている」などについて、もっと「日本に向けて発信する」ということは、日本を変える一つの手段になると私は思います。日本人による日本の研究と国際的に行われている日本の研究がぶつかることによって初めて、日本が世界史の中で本当に位置づけられる、と思います。それを私たちは共同でやって行かなくてはなりません。つまりこれは、日本にいる人達も海外にいる日本についての研究や教育をサポートする人達も一緒になって、内外の日本研究者をサポートしていかないと、出来ないことだと思います。そう意味では

日本研究のサポートというのは国際的な「協力事業」なのだと思います。

「海外でどうやって資料や情報が入手され使われているか？」ということ、日本の私達はあまり知りません。たとえば岩瀬さんの話のように、ビジュアルリソース・ライブラリアン、というのがあって、こういう様な教育の仕方をしている、という現場、それから足立さんはビデオや実験映画フィルムのアークাইブはアメリカではあるのに、どうして日本には無いのか、と疑問を抱いていましたが、そういう研究の現場や環境を、日本で研究をサポートしている人達や研究者は、把握する必要があります。それには見に行くのが一番。最初の話、「学術研究の環境」の所に話が戻りますが、海外の研究現場を今度は逆に日本から見に行く、ということも必要かもしれません。「何故

皆さんが困っているのか」「何故皆さんが苦勞しているのか」ということが分かるようになるためには、あるいは、日本からどう発信したら海外でどう受け止められるか、を知るためにも、海外の現場について私たちがよく理解する必要があります。受信の現場を知ること、ニーズを理解すること、それで初めて、「それじゃあ、こうしたらどうか？」と発信の工夫ができ、発信力が強化されるようになるのではないかと、思いました。

以上、最初の林さんのコメントが海外の日本研究の大枠に言及していたのに対し、私はもう少し細かい点を取り上げました。これで今日のコメントとさせていただきます。

JAL公開ワークショップ コメント JAL Public Workshop : Comments

発信力の強化は 国際的なニーズの理解から

Widening Access and Strengthening Communication Networks
Starts with Understanding the Needs of International Users

小出いずみ

公益財団法人渋沢栄一記念財団 実業史研究情報センター長
Koide Izumi
Director, Resource Center for the History of Entrepreneurship
Shibusawa Eiichi Memorial Foundation

2014年12月11日 国立近代美術館

学術的枠組み

- ▶ 比較研究 = 国際的な文脈の中で
- ▶ マルチディシプリン化 vs 蛸壺化

言語の問題、翻訳の重要性

- ▶ 研究対象が視覚的
専門家だけでない広がり
- ▶ 研究者は日本語がわかるが、資料・情報を
研究者につなぐ司書は日本語がわからない

美術分野だけの問題？

- ▶ 情報基盤には総括的な情報が使われている
- ▶ 画像利用は各分野で IUP
- ▶ アクセス

ネットワークの問題

- ▶ 海外の既存のネットワークの重要性
- ▶ 日本国内のネットワークの強化とオープン
化

情報の集約、ツールの開発

- ▶ 情報が散らばっている
- ▶ 伝える力が弱い
- ▶ メタ情報センター
- ▶ ワン ストップ サーチ

発信力

▶ 情報集約 + 英語化 + オープン化

▶ ビジョン

何を目指して
何を
誰に向けて
どのように

